

譯
詩
集

大正十四年九月十一日印刷納本

大正十四年九月十七日第一刷發行

譯詩集月下の一群(自一一至一二〇〇)

定價四圓八拾錢

著者 堀口大學

發行者 長谷川巳之吉

鐵筆 山田正平
組版所 內田活版所
印刷所 溝口印刷所
製本所 兩角製本所

東京高輪南町六番地
發行所 第一書房

振替東京六四二二三
電話高輪一二九四

佐藤春夫
におくる

序

最近十年間の私の譯詩の稿の中から、ほぼその一半に相當する佛蘭西近代の詩人六十六家の長短の作品三百四十篇を選んでこの集を作つた。

最初私はこの集を見本帖と云ふ表題で世に問ふつもりであつた。と云ふ理由^{わけ}は、たまたま此集が佛蘭西近代詩の好箇の見本帖であつたからである。即ち佛國に於ける近代詩の黎明とも云ふ可き、ボオドレエルから、ヴェルレエン、マラルメを経て近く大戰後の今日に到る最近半世紀の佛蘭西詩歌の大道に現れた詩人及びその作品を、私の詩眼で評價し選擇して作られたのがこの集である。

讀者の見らるるとほり、私がこの集の譯に用ひた日本語の文體には、或は文語體があり、或は口語體があり、硬軟新古、實にあらゆる格調がある。然しそのいづれの場合にあつても、私が希^{ねが}つたことは、常に原作のイリユジョンを最も適切に與へ、原作者の氣稟を最も直接に傳へ得る日本語を選びたいと云ふ一事であつた。

後世或は、語に明に詩に厚き、高雅な閑人があつて、原作と對比してこの集を讀んで呉れるかも知れぬ。彼の温情ある賞讃の微笑を、私は地下に感ずるであらうか？

千九百二十五年四月

堀 口 大 學

譯詩集 月下の一群

蜂

ホオル・ザアレリイ

褐色^{からいろ}の蜂よ、汝^なが針

かくも鋭く、かくも毒あるも

わが胸の美しき花籠を

われは思ひのダンテルをもて被^{おほ}ひたるのみ。

その上に「戀」の來て死にまた眠る

美しき瓢ひまさごに似たる乳房をば刺せよ、蜂、

かくて紅くれなるのわれをして、いささかは、

圓まるみある反そむきがちなる肉の面おもてに滲にじましめよ！

われは速すみやかなる苦痛を希ふ

あらはに激しき痛み

故知らぬ惱みよりは堪へやすし！

わが感覺よ、痛ましきこの金色こんじきの針により

汝目なんぢさめてあれ、これなくば

戀は死しに、戀は眠らんに！

風 神

ボタル・ヴァレリイ

人は見ね 人こそ知らね
ありなしの

われは匂ひぞ
風がもて來し！

人は見ね 人こそ知らね

偶然かはたは鬼神か

來しと見しそのたまゆらに
業ははてつる！

わが詩は人讀ます

人知らず

博士も解かず

人は見ね 人こそ知らね

シユミイズを替ふるつかのま

あらはなる乳房ながら！

慇懃

＊オル・ヴァレリイ

迂路^{うろ}なり、曲線^{まが}なり、
偽^{いつはり}るものの祕法^{ひへう}なり
この遅緩^{ゆるやか}さにまさる
やさしき術、他にありや？

われはわが行く方かたを知り
其所そこへ君を導ほつかんと欲す
されどわが惡計わるだくみ
君を害そこなはんとにはあらず。

(ほこりかに

微笑してあれど

君はややに、わが無遠慮に
あどろきてあり)

迂路うろなり、曲線なり

偽るものの祕法なり、

やさしきわが一語を

君はなほ待ち給ふべし。

失はれた美酒

ホオル・ヴァレリイ

一日われ海を旅して

(いつこの空の下なりけん、今は覺えず)

美酒^{びしゅ}少し海へ流しぬ

「虚無」にする供物^{くもつ}の爲に。

あゝ酒よ、誰か汝が消失を欲したる！

あるはわれ易占に従ひたるか？

あるはまた酒流しつつ血を思ふ

わが胸の祕密の爲にせしなるか？

つかのまは薔薇いろの煙たちしが

たちまちに常の如きとほり

清げにも海はのこりぬ……

この酒を空しと云ふや？……波は酔ひたり！

われは見え潮風のうちにさかまく

いと深きものの姿を！

眠る女

ボオル・ヴァレリイ

魂はやさしき假面により

花のにほひをかぎ乍ら

若い私の戀人は

心のうちに

如何なる祕密を燃やすのか？

偽らぬかの女の戀情

如何なる空しき糧によりて

眠る女のかがやきをなすか？

呼吸、思ひ、沈黙、おかしがたき静さ、

ああ、涙より力强き安息よ、お前は勝つ

この深き眠のうちに、